

# 国際日本学研究科

## 修士学位請求論文 要旨

〔論文題名〕

東京都の家族形態の変化と墓の変容

—都立多磨霊園を中心に—

国際日本学研究科 国際日本学専攻	
文化・思想	研究領域
入学年度	2017年度
学生番号	4911176001
氏名	張斯琦 (チョウシキ)
指導教員	渡 浩一

本研究は、都立多磨霊園を事例として、園内における各種埋葬施設の変化に家族形態の変化がどのように反映されたかについて、現地調査やデータ分析を通して、東京都における家族形態の変化と墓の変容の関係性を明らかにし、今後の墓地のあり方の方向性とその背景にある日本人の埋葬に対する考え方を見いだそうとするものである。

## 序論

序論では、本研究への研究動機として、よく知られている日本の高齢化社会問題と墓地不足からの問題意識と研究背景を述べ、その上で研究目的と研究方法を示した。

現在多くの高齢者が居住する東京都では、公営墓地が非常に不足しており、今社会問題の核心になってきた。墓地不足に対して東京都は、多磨霊園をはじめとして多摩地域に大型公園墓地を次々と開発し、墓地供給を続けてきた。多磨霊園は日本で最初の公園的風景を取り入れた大規模な墓地であり、これまでの墓地観を大きく変えるとともに、現代に至るまで大きな影響力をもつ。このことから多磨霊園について分析することは、東京における墓の変化、そして東京都の家族形態の変化がどのように墓に反映したのかを考察するために、ひいては家族形態の変化と墓の変容との関係性を考察するために最適な場所であると考え、中心的調査対象として採用した。

そこで本研究では、都立多磨霊園を中心に、東京都における家族形態の変化と墓の変容の関係性を明らかにし、今後の墓地のあり方の方向性とその背景にある日本人の埋葬に対する考え方を見いだすことを研究目的とした。そして、研究方法は、文献・資料調査及び現地調査とその調査結果の分析であり、現地調査は多磨霊園管理事務所への聞き取り調査、多磨霊園における施設と墓石の調査を実施した。なお、墓石の調査はサンプル調査で実施した。

## I 先行研究

I では、家族形態と墓に関する先行研究をまとめた。まず、家族形態について。山田(2001)によると、戦前は「イエ制度」の影響で大家族が同居しているのは一般的であった。戦後高度成長期になると、核家族が増加し、標準家族と呼ばれる夫婦と子供二人の4人家族が主流となった。現在の家族形態が多様化し、未婚率の上昇や晩婚化により少子化が進み、高齢夫婦のみ家族や高齢者の一人暮らしがこれまで以上に増加することが予測されている。

墓については、たとえば、楨村(1993)は、社会構造やライフスタイルとともに家族形態の変容が墓の流動化、無形化、個人化をもたらしたことを明らかにした。井上(2003)は、世帯の縮小や人口移動、夫婦家族制の浸透が墓の継承の仕組みや先祖意識を変え、多様な墓や埋葬形態の出現につながったとする。このように、家族変化の中で多様化が進む日本の墓地を考える上で重要な視点が提示されている。

## II 東京都家族形態の現状

IIでは、明治以後現代にかけて東京都における社会構造や家族形態の変化を数量的統計によって、それらの特徴を分析した。その結果、大正時代から核家族世帯は全体の半数以上を占めており、特に戦後の高度成長期の中で、一層核家族化に拍車がかかり、さらに、未婚・離婚の増加などにより単独世帯も増えていることが明らかになった。近年、一人暮らし高齢者は急増している。このような家族形態の変容は、墓にも影響を与えている。つまり、東京都の墓需要が増加していく一方で少子化により墓を継承できないという問題が起っている。

## III 東京都墓地の現状

IIIでは、都立霊園、寺院墓地や民営墓地という三つの種類から東京都墓地の現状を整理した。東京都では相当な数の墓が不足しているという現状である。東京都の都立霊園は民営墓地や寺院墓地に比べると永代使用料や管理料が安く、また、宗旨宗派が不問なことから、どの地域でも人気である。しかし、抽選倍率が高くて都民の墓所需要に十分には応えきれていない状況がある。新たに霊園を開設することは難しい状態であり、既存施設を増設したり、再募集したりすることによって供給している状況である。

## IV 多磨霊園の現状

IVでは、多磨霊園の施設種別の特徴を考察し、墓石のサンプル調査によって得た情報を数量的に分析して家族形態の変化と墓の変容の関係性を明らかにした。その結果、今の多磨霊園全体のほとんどの部分は一般墓地である。一般墓地（1923年供用開始）において、戦前は「イエ制度」の影響で古い意識を持つ大家族がまだ多く存在しており、「先祖代々」「三代」という家族形態の墓地が一般的である。戦後は、高度成長期の中で核家族化が進んでいくに伴い、「三代」という家族形態の墓地が減少している傾向であり、「親族」という家族形態の墓地が現れて1割前後である。50年代から「親子」という家族形態（いわゆる核家族世帯）の墓地は出現しており、次第に増加し、全体に占める割合が3割に近いことである。90年代以降「夫婦」という家族形態（いわゆる核家族世帯）の墓地の出現に伴い、「親子」という家族形態の墓地は若干減少する傾向が見られる。それは高度成長期の中で核家族化が進んでいる現象と一致している。また、90年代末から「一人」という家族形態（いわゆる単独世帯）の墓地が増え、全体に占める割合が「親子」「一人」とほぼ同程度である。そして、芝生墓地（1962年供用開始）と壁墓地（1993年供用開始）の登場も、それぞれ造成した年代における家族形態の変容に合わせたことが見られる。また、都民の墓地需要の飛躍的増加に応えるため、みたま堂（1993年供用開始）と合葬式墓地（2003年供用開始）が造成された。他には園内にあちこち無縁墓も出ており、やはり少子高齢化の影響で墓を承継できない問題が浮き彫りとなっている。このように、多磨霊園における家族

形態の変化と墓の変容ははっきり繋がっていることを明らかにした。

## V 市民の墓地に対するニーズの把握

Vでは、過去東京都市民への意識調査の結果から、墓地に対するニーズの変化を把握し、今後の墓地のあり方を探ってみた。東京都では、新たな墓所を求めることが困難になって久しく、応募してもなかなか当選できない公営墓地の高競争率の少ない募集枠などもあって、個人の墓所を持つことにこだわらない風潮が強まっていく。家族葬など、葬儀のコンパクト化や、樹木葬や海洋葬などの散骨による自然葬への関心の高まりとともに、従来のような、個別に墓所区画を購入して墓石を建てて納骨するという形式にこだわらない人も増えている。その気運が、都心周辺の納骨堂や永代供養墓、郊外の広大な霊園施設における樹木葬といった、新たな形での永眠の場所を、さらに増やしつつある。

## むすび

本研究では、都立多磨霊園における各種埋葬施設の変容に焦点を当て、墓石調査の結果、家族形態の変化の影響を受けて墓も変容していることを明らかにした。だが、IIの東京都家族形態の分析では、大正年代から核家族世帯が既に全体の半数以上を占めており、70年代以降単独世帯がどんどん上昇し、近年では核家族世帯と同じ割合になっている。これを多磨霊園における変化と比べると、家族形態の変化が墓に反映した年代は遅れていることがわかる。その原因は、死者になるまでの時間差だと推測できる。また、意識調査から見た市民のニーズにより、承継者がいないことによる墓の無縁化を防ぐために、納骨堂や合同墓、樹木葬など墓の多様化が見られる。今後、墓のあり方は個人単位の葬送へ移行していくものと思われる。

## 参考文献

- 井上治代（2003）『墓と家族の変容』岩波書店  
槇村久子（1993）「近代日本墓地の成立と現代的展開」京都大学  
山田昌弘（2001）『家族というリスク』勁草書房